新々拾遺　六

圖書番號 10774 六冊

雑々拾遺巻之第六

古跡の部

本朝茶道のはじめ付東山殿并珠光利休が事　三丁メ
円融院の御宇大宋の天狗日本へ来る事　五丁メ
道光石口伝の事　七丁メ
志賀の人和事とよみがへる事　同
夢窓国師上蔵乃事　八丁メ
和田賢秀誅せらるる事并奉納武具の事　十丁メ

九曜文庫

応永大乱の後延暦寺衰微の事 付 円通寺
門跡号幷大内義隆毛利家の事 十丁メ
藤原行季が子を讒しける事 十一丁メ
京の寺の多く方角と定むる事 十二丁メ
古時の定法 付 破戒仙人の事 十三丁メ
七夕のゆらい 付 遊子伯陽が事 十四丁メ
鬼神の由来の事 同
起請文濫觴の事 十五丁メ
蘭奢待の縁起幷東大寺の霊宝等
ちまくの事 十六丁メ
本朝絵師来歴の事 十八丁メ
色紙短尺の事 十九丁メ
法隆寺きうねの事 廿丁メ
道者老人山伏と問答の事 廿一丁メ

雑々拾遺巻第六

本朝茶道のゆらい　付　東山殿并珠光

利休が事

本朝茶の来歴をたづぬるに。桓武天皇の比よりもろこしより渡り。其後和朝に植へひろめしは。志うまでとも今時のよき茶にあらず。只そのとのがまゝよ出生するを葉とを清を日にほして煮るばかりなり。禁中にては挽茶節会とてもちひしより座敷ことあり。二條の摂政良基公の説として海人藻芥にみへたり。右大将家の世に宝鼎二子五百を遺

茶をもてあそびたまへり。南禅寺(なんぜんじ)の月舟(げつしう)茶の賦(ふ)にしるす。彰朝御(ご)…の後、将軍家の政務(せいむ)にあさらく。建仁寺(けんにんじ)の千光国師(せんくわうこくし)栄西(やうさい)もろこしへわたりて、よき茶(ちや)の種(たね)を得て本朝にかへる。栄西日ごろ栂尾(とがのを)の明恵上人(みやうゑしやうにん)と昵懇(ぢつこん)をむすびて、先(まづ)あつけゆく。秘蔵(ひさう)する茶のたねを栂尾山へうつしける。明恵房(ばう)大いによろこび、四方の山谷(さんこく)の土地(とち)をえらむ。件の種をところ〴〵蒔(まき)ちらし、なかにも宇治にうゑし。ことによく世上にひろまる。されども本(ほん)の茶とも、いひて賞(しやう)するは梅の尾なり。非(ひ)といふは宇治茶也。

うゆく〳〵北条(ほうでう)の執権(しつけん)より足利(あしかゞ)の代々ます〳〵茶を愛(あい)す。中にも尊氏(たかうぢ)将軍の孫(まご)、北山の大相国(しやうこく)義満(よしみつ)公の孫、東山の公方(くばう)義政公。さらにの風流(ふうりう)をこのみ、茶席(ちやせき)四畳半(でう)をはじめて財宝(ざいほう)名物(めいぶつ)をとゝのへましまゆくり。義政公は不(ふ)…能(のう)ありしといへども、事は祖父(そぶ)北山殿の遺流(ゆいりう)をまもり給ふによつて也。しかるに能阿弥(のうあみ)珠光(しゆくわう)などいふ人出来(いでき)て、此わざさかんに、むかしの茶礼(されい)をさだめ、茶をあぢはひのは、よろしくして亭(てい)を作(さく)意のよしあしとはなす。これらは古法(こはう)にあらざる事なり。茶の湯(ゆ)の根元(こんげん)はそれ

やすらかに茶を点じける。精気をやしなふゆへに。数寄といふは物事くはしく式法を立て。料理以下までに心をとゞめり。ことさら造ることとくしはじめ。稽古やすからぬをまたくここにす。これより古例をもどさぬごとくなき事なり。紹鷗より珠光八茶を専らにして風流の作者なり。併ながら先祖村上天皇より出て当流の源氏なりしが。珠光茶道に て茶の湯を指南す。それより今の世まで家服の下まで人ゆうらたる宗人なり。浮田於徳なとこのみし羽織のこしんぼうをやうつしにあらず。後世につたへ茶器のこのみあり。珠光院子といふはこれなり。其後千利休といふもの茶道を改む。利休は桓武天皇の後流宗易四郎兵衛といふ嫡子。真田の子也。茶ながく泉男千宗旦郎右衛門といふものまた茶なり。げにや利休一世の事くらしなしときまり。

安融流の宗大唐の天狗日本へ来る事人皇六十四代安融院の御宇ふたたびあらはれしよりてかくの天狗ならし。日本の高僧と智とくらべん

といふて先比叡（ひゑい）山へのがれぬ宮（こ）に天狗の棟（とう）梁（りやう）山の小僧（こぞう）に出合（あい）てこゝあしましとうるは。小僧がりゆやうもむかりまうとらくぐしぱまづまづ〳〵山の本（こ）のむかふこうてまちかく当番（たうばん）山（ざん）の智識（ちしき）達（たち）やうがく御通（よと）りあんとさぱこゝいで霊験（れいげん）をとくぐらくぐしとやもとぼバ。天狗大きるはたゆうとはゆちうしてぱ。薮（やぶ）のうぢふうくをまでぱめくら。小僧さりしくおりむあづしぱさしけるのさまぐとう修行して天をつゞて見物すぱまけりぱうりけるぞて余（よ）慶（けい）僧（そう）正（づ）坊（ざ）は参り（わ）てこさうり

たまへバ。すゑや和尚（こん）の勝負（しやうぶ）変なりとおもひ。僧いまこゝろをきびしてまとりもちるゞ。常に相（あい）違して天狗は形（かた）くうしさとよめず。余慶（よけい）はいうくことをまづでとりくり給ふ。小僧天狗にむかつていふ゛得るぞやとりくゞバ。天狗みるかに大きにさぞまじるもあつをまにむかしぐんやをにおりむかしけども。興（う）のうちにて神呪（しんじゆ）をとなへるにのとさき時五体すくなき身（そう）にかきさわしてさらずけり。和尚（をさう）ものをあくずあまる山（せうし）やなるくきくましうむかくあさましさよ。通（そう）をも文智者（ちしや）とかなる

おしがたき事に詣してなほもぞさまざまの所願とすく
ござなくてしいへば。天狗なほもその法をしといひて。又
我と思ひてまちのかり。其後飯室（いむろ）の深禅（じんぜん）僧
正與ふのりかかれみをとらんとて天狗又さきのごとく
なれもわすれ行あく南山の座主（ざす）慈恵（ぢゑ）大僧正あか
くの僧をまもらんずへ。此僧をくづりをだしられふしぎんば
さまざまの事ども一町だるり時まつでう龍
と地にまつをる石をしろしら。ぶ座主るをたまして後物僧
みむろく。あふおそろしふ不動明王（ふどうみやうわう）にあひたてまつりけ
るが時めしちくくうりて八方をこびまわしと思ひければ。

智（ち）をとらんとしければ法力もあらそはずして返の所
にかへらずさりぬ。此事くはしく真言（しんごん）伝に見えたり。
はた天狗のつとさと善界坊（ぜがいばう）といへるもありしや。本説なけれ
ども古事（こじ）ともきこえず。謡にはつくるも
面白かるべし

浄蔵口伝（じやうざうくでん）の事

中比より人の浄蔵（じやうざう）と祈るに験ありてしるし。僧にて又
字をと声（こゑ）にて誦（せうじ）ずることのありがたきあやまりし
けるべきにや。蓮中記（れんちうき）に此事をのせたり。但出家し
て法界小用かねての子細（しさい）ある事なし。俗家（ぞくけ）の財あるらひハ

定朝時清などハみなよろしきと。よつて定綱時清などハこの手三昧に移りむかしの俊成定家にどもも自身にまなびぬといへども名のミす俊成定家ともなるべからず。されバてならふ音を移するに似よりもくとおもへハ手本なりて又法の書稱まさしくこゝろの躰にあらず野の宮明とちやうあいといひ吉田の兼好ともまたいふとも法名あまねくしらるしうび

しげ其の人和書とよばるゝ事

あまり法師の筆法能く和書と申すべき。御紀様

ならふとも及ぶべし。佛者ハ西天の筆をつたへたり。儒者の手ハ遠土の筆を伝へず。百家諸流すべて異域の書をあらはしむるにハあらず和俗のうし。是まなぶべきハ時ふのぞこそ尊圓する筆なるべし。その文字と古の手人ハ尊一和綱の筆を習まなぶべし。中ハ和歌の儒者をもとし人に示し時ハ定綱の人本意の所へかへしうかずして。日本の筆の道を継ぎしうかバ。けつして字を書くことつまりてめでたくましき事ありしとぞ。

飛鳥井雅卿上書の事

夢窓国師は足利家の帰依によつて。嵯峨の天龍寺をひらきし。ます〳〵禅法を興隆せらる。此寺はむかし嵯峨の天皇の后檀林皇后の御願檀林寺の旧跡なり。此寺破滅の後亀山の法皇離宮としてすまゐを給ひしが。程なくあれはてぬるを。暦応年中尊氏卿夢窓国師と相談ありて天龍寺と建たまふ。夢窓にもて夢窓の威光天下に扇ぐとあがむる人多し。ある日夢窓上人のもとに他寺の禅僧相ちかひ。洛中洛外の法問僧を語ひ。夢窓と対問して恥をあたへんとせしに。そのころの御坊にハ先師の縁を天龍寺へ法とり。上壱の什物のうちをもて。金翅鳥王宇宙にあり。天龍いづれの處にむかうて出頭せんといへり。夢窓国師少しも一言に及ばず。吞却龍よりひて退出をよこふ。味方の僧ありしがいひけるハ金翅鳥ハ大鳥よく龍をとりてくらふのミ。天龍の夢窓いかゞの辯をとりてまゝえ。金翅鳥にあひなバ只一口のまるべく。金翅鳥ハ他寺の禅僧にあたるべく。天龍ハ夢窓に比す。吞却龍とハ天龍をのまする事の安き之。迄ありてハ法問僧夢窓に向て一同

すでに時義行ともに地にふして。かれ梁さとりて
みづから首ふかくしきりにひらきしめけり。は
師直子元遠して無向にありけり。黙として
退出すれけるに。今朝島親王の子をとれくてに
時。就非世なくみてくまへまでか家か業をとあ
らく是を親の角にまきけぐしと御しけ。家紀
よろこび。お敵のづくしたまゝまでば。今朝島をとらせ
てちかづくまずとゝに年久あり。若君利弁強頭の
ら師あるよろぶげてはりくとまつて黙然をれま
て。今朝島の師是非なく法向にまもりて帰ぬ。

こもようり法華の経師和歌をまつりをもと若君を
あけぐしとてり。

和田賢秀経を作る事 付 孝綱武具

敏達天皇の後胤和田賢秀は。楠が親族にて法記
なる勇士なり。軍勢にも達し敵をおそれざるとある
をかす。暦応年中手経の中より経をとまもし始て
作り出す。是縁兵と謂ふ利あるものなし。既に秀
経にて古きに軍利をゆるり。後楠正成卿の
ときは経を以て敵をけす事あたはずし。これより
法家にあしひてあかくゝしく法の古き郎等の宗

愚とおもへり。凡武家の中にも殊に補佐たりしこと
あり。人皇のはじめにあたりて道臣命東征のとき。
やゝ久しく武臣をもちゐられり。神功皇后異朝
退治のときも。ますく加く〳〵のごとくにもちゐられしより後
乱世のたびごとに諸人思案をめぐらし。ひろ〳〵の武臣
をたのみ出す。末孫又そのほかも不学の諸
愚成乱して世不治となる。

弘元兵乱の後武家上衰微の事 付 元乱

寺門頭号并大内義隆毛利家の事

應仁兵乱ハ後土御門院の御時なり。山名金吾入

道宗全と細川右京大夫勝元と権威をあら
そひ。洛陽の東西を戦場としておよそ十
年ひさしくたゝかふ。洛の公家人家ことく洛中にて焼亡
す。けふ兵乱より以来の諍ひありまかせ。諸家の録記
頭号ことごとく滅却す。将軍公門をもちゐず。諸
ハ向紀と焼ける酒をあらため冠をとらげして足り
ちくのたぐひまで不用をもあくらまぬ隙なかり。天
王の在位四千余年までに御即位の式なし。けれ
東乱寺より御即位の料を献じて後柏原院御位
につきぬ。すなはち叡感ありて准門跡の号を

勅免ありし是尊き准門跡猶子のはじめなり。後柏
原の次後奈良院御即位の時は大内義隆金料
を献じて践祚の儀を遂しめ奉りける故を
して叙二位権大納言と御免ありて義隆公卿の
列にいる。又正親町院御即位の時は元就て
藝州毛利家より御料をたくはへて践祚の
あり。すなはち勅賞ありて菊桐の御紋ある錦の
むしろをとりし程。其後は次第くに世をさま
りて御即位滞りなし。

藤原の行季故実を撰ぜらるゝ事

世尊寺の行季は累代の能筆なり。あるとき院
帝におほせありていそぐべからざる巻をかゝ
せ給ひしが行季いかにしても遅延あり。経を半くときは
成ばじめてかゝざりし。其文字を書けるは天満宮
の後。あるひは五七年あるひは十年ばかり経
こゝろざしうちもよりむきさしされば筆をとるとし
て泡ごちて禄ずり清らくまつしう字。筆
画をとりなほして人に筆をとらするぞかしんとゝを
しくらまきもう

火の字の土にて方角を定むる事

天あれバまたそれぞれあり。地にハ人倫鳥獣山川等自然に出生する事世界の定法なり。是本ハ一つのことなれども人の心にて區畫し其法をさだむるもしはじめなり。先方角をさだめ晝夜を十二時にわかつてこれに名をつけ文字ハ皆獣にてかりにあらざる字なれどもあり。さるハ酉といゝても鳥のごともあらず。うしといゝても牛に用ず。十二支ともまたなり。萬物本来其であるがゆへにけ文字にもあるべきものなり。無の字竪横十二畫あり。竪を以て方角を十二に割付る。東西南北の四方より

四ツを割出し。又四方を段して以上十二と。さだまれバかならず方になづむべからず。されバ其まゝ居所より方角を指なり。それぞれ某郷にてハ東なれども隣国にまたハ西になること。是を元来其東西といふなり。されバまた人ハ本来をとおりて行まじ。まよひものハなまじひにそのものの格致をとほしけるものなり。これらの事能々心得事なり。

十二時の定法并漏刻仙人の事

晝夜の刻数をさだめて時をしる事黄帝の代よりさだまる。其後周成仙といへるもの法を作り出じ

未然の吉凶をしらするにあらずといふ事なし。その後伯黄帝と同帝し。天下泰平のまじなひとして十二時とおこしせ。十二支の内申と寅との二色はうしろ物なり。然るに虎山の虎まざれば。猿山のさる世をさはがす。こゝにおいて善根をはかりあはれみて猿虎のうれへにあてるやうにとねがひとりくだし。未の月は午の剋なり。是より毎月めぐりあはする。うるがゆふに毎月おかう夜の毎月は子の剋なり。是より毎月は申にあてることにおいて八卦中央とうちならべ申子によあてることぞ。二つの事をそのとしをまもれば。是終にうしなふとかなへて天下にまさりむなしきを提なり。此事土文経に出たり

七夕の由来 付 遊子伯陽が事

むかしに瓊列といへるものあり。家に妻子伯陽とて夫婦のちなみ有り。殊に月をこのみおもふにあくことなし。伯陽九十九の年死なり。妻子かなしなげきふ。はかなきをそでにいよいよ月とながめかりぎり。ある秋伯陽鳥に乗て月前に来りえいめんなる。けふのまつり伯陽が雲日に帰しをえ。妻子歩くな

ぎこえみ孫なく孫なし。孫子又なんじよに伺し静に案ずるに行て二星となれり。また牽牛星とありて牛を牽て居り。女ハ織女と成て機を織る。これらを世にいふしなし事なくかく淮南子にいへり。

鳧鐘の濫觴の事

鐘の由来をたづぬるに。世尊霊鷲山にて説法の時。聴衆のともがら遠近をとをくて度に告きこえしめんため。御弟子相擬して是を鐘とさしめける。其記ハ龍宮の風情とまなびたるものなり。龍王事ゑて

法魚と呼びしき鯨鯢に當りて其蒲牢となしむ。其声遠くふきこえて法鐘となれり。其蒲牢といふハ海中のけだ物なり。これハ夜叉のごとし。後世の法りが孫ハきあらく。鐘のいでこを龍宮といふハ誤りなるや。龍のかしらにあらず。あるかぎりわく。又鐘を背鯢華鯢などゝいへる是をあやまりて。鯨ハ鐘木をいふにてあるべし。鯨が蒲牢をおひかけり。又九州海に出し鯨ハ楊州の道昌僧正といふ人鐘の由来をたづぬるの時。行事をいてうかゞり延喜にきされきかし古き物語にあるなり。世よ

ばかりまでとおもふ人まゝあり。

起請文の由来の事

起請とは請を起すといふ心なり。むかしまく八百万の神のまへに出て筆を執てすゝみ切りち中にふかく。事を四とのへて句読をし一事にいひ合するにそむかずは、あのくへ。筆のついで切ちぎりなべしと約す。これを盟といひてすなはち誓詞を約く。本朝神代のむかしもけふかしあるまじや。人皇よりおよび、応神の御代に。武内宿禰の讒逆のうたがひを散ぜんとて。熱湯に手をいれしに。少しも手を焼て損りなど

するこれを湯起請といふ。後世の起請文はこれなり。神を請ふにそもしいつはりあらば神の罰を蒙んとの心なり。いはゆる大和紀中臣の属をとる時は其の人にむかつて。ある人熱湯誓詞の事を語るに。常よりの如く。熱湯よまもとへまんより水にまをひたすべし。其筋をかざしめんよりは湯塩をつまみてあらうべし。其はうらず神を焼まきりましり。やまをねらしずあらば。水まてみ焼くふしぎもあらんといふや。かゝる是にかまてけす事あらばらくとことわり。然れども後まれ又とものゝごとし。如記

利口のあまり一円転くと啖といひても。これらも清くとあざむく物なり。此くとあまりいむあらすれはかやうの事をいふなるべし。

蘭奢待の縁起并東大寺の霊宝等志

ならびの事

蘭奢待といふ名香は。聖武天皇の御時異国より来りし珍宝なり。将軍家天下草創の時。寺門と造営して。件の香をあらためしは一寸許は一寸半切取給ふ例あり。其後尊氏卿は一寸切取給ひ南都へ色こ寄附し給ふといへり。世の人伝へ云事あり。此物を切れども本のごとくに成て其の不減をぞ示し。さらにすこしも減少のきざしもあらず。件の香粉百と称して持ぬる者あまたあれど。皆あやしく古口と知るよ。臍こら奈く本のごとくみなかゆて。香と云ふ物守南都三綱の時。浄蔵の霊物と所縁あり。其穂八十握ぐらりなり。其内本の霊宝なり。

一 蘭奢待木口一尺長五尺一寸あり。本のごとく来りしより。香木は木の中にかくれり。其穂一さゐはかたまりて。穂の中にあつまりて異香も名香のごとし。此地東大寺の霊宝にまさるものなし

めんこめ。蘭奢待となづく。三字の中に東大寺
ちんみ字こもりけり。
　　　はかり
一 右同じく長三尺の沈香あり。是東大寺の沈香の
なかづくるにあらんぞ
一 御剣　　　三振
一 鉾　　　十本
一 麝香瑠璃の壺一つ
一 金銀の道具　いろ〳〵
一 人参巻絹金襴緞子等いろ〳〵あり

一 古鏡　　　あまた
一 扇子の針　　三千本
一 赤栴檀の碁盤同石は紫雲瑞鳥金あり
一 唐絵の屏風　　あまた
一 猩々皮毛氈　　おほし
一 聖武天皇の御道具さま〴〵あり
右之外に御装束の具あるひは種々の宝物等
うづつるにいと限あらじ

本朝仏師ゆらいの事

本朝むかしより仏像をきざむ人おほしといへども

まさしく仏工の始祖といひつべきハ定朝法橋也。かれハ光孝天皇の後胤源性なり。幼年にして叡山へのぼり出家す。天台宗に達し弁説人に勝る。恵心の僧都細工の師なり。後に定朝故あつて還俗して伝流の仏工をはじめて法橋に叙せらる。あるひハ法眼を経て法印にすゝむも仏師の系図にあり。されども世書にハ只法橋とばかりあらはしけり。定朝奇異の仏工なるゆへ人是を讃。来る事市のごとし。七條ちやうに三四方の小堂をいとなミ居住し。人来て彫む時に

仏像を刻ミ造る。但あたいを定て作る事なし。是をもて家楽坊といひて仏工の嫡流とし。定朝一生のうちにきざむところの仏像造作数あげずといふ事なし。数百年を経て後白河院の御宇に運慶といへる仏師あり。定朝庶流なり。運慶がむす子湛慶ハ父にまさり。運慶が弟子安阿弥といひしもよく細工に奇あり。されども定朝にハおよばざりし。安阿弥ハ奇妙の仏師なるゆへ師名を得て天下に名をあげける。その後仏師に名人なし。但東寺の大仏師の仏像を刻ミし康勝也。小山[illegible]

の唐紙を漉くことし大弘師とあれバ。古今にも和ぎしめられけれバ梓紀名僧のさざ語のつと梓紀とあづくん。禁裏へ造進しけるを大弘師と号す。今の経師ハ大の家のはじまるべし。

色紙経師の事

色紙ハ孝謙天皇の御時よりはじまりし事也。経師ハ文武帝海上彼の国武后の時よりはじまるといへり。あるひハ定家卿の孫為世の時分物らしと云ば古紙大かたふ立つるべし。経師も色紙とおなじくむかしよりこれありし。但し延長の時代ハさだかならず。

宇治左大臣頼長公の日記に。鳥羽の法皇より灌頂うち経師を召されしを表具し給へり。頼長公ハ当世より百余年以前の人なりされバ古来より経師ハありしと。

法隆寺経師の事

和州法隆寺ハ上宮太子の御建立にてむかしよりる古跡あり。法隆寺ハ寺の菩子の下に宅を壊て住めども人しる事なし。延徳の比住持なるが関東ゟ方の経師に折りなくも教十日還向の内。法隆寺より来て経師のうちに聖徳太子出現の由

を見ずね。御祈りしつゝ円頓今元祖来現のいくまゐ
しるそ給今すぢさるる元祖にありて書おける
ようとのふまで。御おもしろさむおもしもあまりの涙
やうまして本尊へことのかゞふてからへまかりてこ
まだ生身の尊容を拝しまつりし。御祈り申のふどりてしんあく。
いつくの清浄を四方にまついて奥旨をとゞく。御一大事
口授を施ふしもたまてらして鈴ふいでさけてそ
して御祈尊をまを仏典よりおそわす。則ちてとあり
てもうしてめず。前後一日小師を記すさなる教旨
年中の下にあつて。祈祷の法門をさゝてゆくまく。

伝と清しすといへども。大事の口伝は唐てぐるゆく
後みれ解とつり御事ぶらんぶくしつの秘事にあるべく
ことの有り。

道比老人山伏と問答の事

文明年中落魄の事跡として気随ものあり。伝
雑人のすぐも清みふ達し。毎て問答とその手くらぬ
ありしある時病人の家へ山伏きたりて祈念をとりもし
ず。道者折かし祈るく山伏よむりとし所念め祈祷
よまつく病をあらとすべきしいとどろ祈祷ありと
いふ。山伏うくるゆゑ。ちとうまそうし祈念よりて病

きたりごとくに年余しみ悪人あまたくちまち
いのち絶えず事飯にありし清濁分者人にひらく
す。道をうるをそのいく。病人の酌南のち要は。先ず醫
薬縁香の妙法をしてもるぐもまま。いのちはやまひよ
うざるぐるびを。おもりて延をとくとらんたちあまたなるふ
信力をもむともますずしけにみえく見ずぐくとしるべし云。
山依たよふに立腹すれば年をあかをやうしまど。病人より
おもじじきたき方よおそて事あり。足たて利もとに新
こうてえびなく。おもじし年ともみげをいるさろにゆめう。
たくさかのむしのの林死よ一年までまふに生おくと述

きんとみ。弦者やめて今日は周年お伺くおり。き風
いうをねてのまふにこそきとにむすみそやく立舌
しきり

本文云
右之草案者藤原行之連〻閑暇之砌
所被集記也如常令加見之許之云

元和三年三月日

藤原判

巻之六終

元禄八乙亥仲冬日

洛陽二條通新町東入町

武村新兵衛板行